小学国語通信　2010年　秋号

ことばだより

目次

巻頭随筆　言葉にとっての正しさとは …… 川島　誠 2
国語
特集　新学習指導要領の課題にこたえる
小学校における古典教育の基本的な考え方 …… 岩崎　淳 3
説明文教材を用いて論理的思考力をはぐくもう …… 茅野政徳 7
文学教材の舞台
加藤多一と北の文学 …… 渡辺知樹 12
教科書ナビ　読む単元
笑顔いっぱい　四年一組かがやき寄席 …… 小林康子 14
書写
学習したことを生活の中に生かそう …… 宮本　忍 16
資料室 …… 18

教育出版

言葉にとっての正しさとは

川島　誠
作家

若いころは、「言葉の乱れ」とか聞くと、鼻で笑ってました。新聞紙上で「識者」が嘆いてたりするたびに。

何を言ってるんだ。言語というものは、常に変化する。歴史的に見て、それは、むしろ当然なことなのだ。

基準が単にその保守性にしかなく、正誤が、結局は流布の度合いによってのみ判定されるのなら、言葉について議論すること自体が本質的に無意味。

文句を言う人は、世の中の移り変わりについていけてないと自ら証明しているにすぎない、と私は考えた。

ところが、時は、意外なほど簡単にうつろい、最近、私は、世間ではやっているいくつかの表現に耐えられないでいる自分に気づきます。

例えば、政治家が、その政策はまさに「真逆」の発想です、などと力説するとき。彼らの本能として、インパクトのある言葉を選択してるのでしょう。でも、なんて汚い。「正反対」で十分なのに。

「目線」って？　そんな言い方がトゲトゲしく耳に突き刺さるようになったのは、いつごろからなのか。「視線」との、根本的な差異は。

「それ、上から目線ですよね」という発言があったとたん、場が凍りつく。なぜか論理を超越し、いわゆる「言ったもん勝ち」になる。なんなんだ、この表現も。

「こだわりの宿」にだけは、泊まりたくない。「こだわる」っていうのは、本来、気にしなくていい些事にとらわれてしまうという、ある種の感情的な強い否定の表現。料理長が「こだわりの一品」を出したなら、彼がそれに拘泥したせいで、今晩の食事全体への配慮を欠くことになってしまった、ってことを示唆してるのに。

私は、これまで、会話体で小説を書いてきました。正統派の文学の支持者からは、日本語を紊乱（びんらん）する側に目されていたはずで、出版社から戻ってくる原稿の初校は、そのチェックで真っ赤になっていた。かなりめんどうだったんですよ、編集者に一つ一つ反論してくのは。

けれど、そんな短編が、最近はいくつかの中学の入試問題に採用される始末。いよいよ、私も「焼きが回った」のか。これは、辞書にも載っている、たぶん、ある限定的期間に流行した表現。

ということで、国語教育を実践されているかたがたには、全く役に立たない話でした。

世の中の流れという勢いの前には、圧倒的な無力感を覚える。でも、子どもたちに、時空を超えたさまざまな言葉にふれる機会を提供していただけたら、と本気で思います。そのあとは、彼らの感覚を信じたい。

ただ、先生たちが上機嫌で、この物語はこんなにおもしろいんだよとか言ってくれれば。（可能なら、なかでも川島誠はとてもいい、と。）

だって、ほかに手はないって気がする。

かわしま　まこと　一九五六年東京生まれ。『８００』『セカンドショット』『夏のこどもたち』『海辺でロング・ディスタンス』（角川文庫）、『しろいくまとくすのき』（文溪堂）など。生と性の本質にきりこむ作品を書き続ける。『８００』は、九四年に映画化された。

特集

新学習指導要領の課題にこたえる
――新版教科書を使いこなす――

小学校における古典教育の基本的な考え方

学習院中等科教諭
岩﨑（いわさき） 淳（じゅん）

学習院大学・都留文科大学・早稲田大学等で講師として国語教育および日本語表現に関する科目を担当。著書に『言葉の力を育む』『古典に親しむ』『授業改善をめざす』（いずれも明治図書）などがある。

■はじめに■

平成二十三年四月より、新しい学習指導要領に基づく教育課程が実施されます。現在は移行期間ですから、すでにその内容をよく知っているというかたもいるでしょうし、まだよく知らないというかたもいるでしょう。

新しい学習指導要領の特徴の一つは、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設されたことです。このことは、小学校の低学年から古典教育が始まるということ、義務教育段階では古典の教育が重視されているということを意味しています。

新しい学習指導要領の基本的な考え方を確認したうえで、これからの伝統的な言語文化の学習指導のあり方について考えてみましょう。

■学習指導要領の内容■

新しい学習指導要領では、各学年の内容が［第1学年及び第2学年］［第3学年及び第4学年］［第5学年及び第6学年］というように、三つに分けて示されています。

次に、伝統的な言語文化に関する事項について述べられた部分を抜き出して示します。

［第1学年及び第2学年］(1)ア
(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

［第3学年及び第4学年］(1)ア
(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

［第5学年及び第6学年］(1)ア
(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

こうした内容をどのように指導していけばよいのでしょうか。

伝統的な言語文化の事項については、前提として次のような記述があります。

「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

「次の事項」とは、伝統的な言語文化の事項と国語の特質に関する事項の両方をさしています。

また、次のような記述もあります。

特定の事項をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要な場

合については、特にそれだけを取り上げて学習させるよう配慮すること。（「第3指導計画の作成と内容の取扱い」2(1)ア）

つまり、三領域の学習と関連させて指導していくことを基本としながらも、場合によっては、指導者の判断で弾力的に考えてもよいということです。

伝統的な言語文化に関する指導については、各学年で行い、古典に親しめるよう配慮すること。（同イ）

これも重要な記述です。これは、先に示した内容を小学校の一年生から六年生までの各学年において継続して指導することを示しています。

■古典教育の基本的な考え方■

中学校における古典学習は、古典に親しむ態度を育てることに力をおいています。中学校で古典文法を教えることはありません。古語辞典を使わせることもありません。独力で原文を読解していくような力を育てることをねらいとはしていないのです。

中学校でもこうした状況ですので、小学校段階であまり難しい学習活動を想定する必要はありません。熱心なあまり、無理な活動を設定すると、古典嫌いの児童を生み出してしまうおそれがあります。

前に示した学習指導要領の内容は、次の三点に要約することができます。

一　古典の世界に親しむ。

二　文語の文章に慣れる。

三　古人の考え方を知る。

「一」の「古典の世界に親しむ」というのは、現代とは違った時代が存在したのだということを知るのが第一歩です。古典世界に親しむためには「必ず原文で学習しなければならない」と考える必要はありません。時代が変われば、社会制度も風俗・習慣も大きく変わります。当然、二十一世紀の社会や生活とは異なる部分も多くあります。

一方で、文化や伝統は今でもわれわれの心の中に受け継がれています。古典は、日本人の美意識や人生観を形成するのに大きく関与してきました。桜の開花を心待ちにして、葉桜のころまで楽しむ、秋の海岸の夕景に情趣を感じ取る、季節の推移の中に味わいを感じるなどはその例です。

「二」の「文語の文章に慣れる」では、文語文の音読や暗唱ができるようになったり、ことわざや慣用句などを文章の中で適切に使えるようになったりすれば、達成されたと考えてよいでしょう。

「文語の文章を暗唱する」といっても、長い文章を覚えさせなくともかまいません。短歌や俳句などの短い章句が適当でしょう。文語に親しむ学習活動については節をあらためて後述します。

「三」の「古人の考え方を知る」のは、昔の人の感じ方・考え方を知り、それを自分の生き方に生かしていく態度を養うためです。過去に学ぶことが有効な方法であることは広く知られています。さまざまな時代、さまざまな社会状況の中で、古人がどのように考え、どのように生きたのかを知ることは、後世のわれわれに大きな示唆を与えてくれます。必ずしも原文だけでなく、口語訳や解説など、現代の言葉で書かれた文章を活用しましょう。もしも原文で学習するならば、易しい文章や短い部分を取り上げるとよいでしょう。

日本の古典はさまざまな魅力にあふれています。小学校は、そのとびらを開く大切な段階です。「昔の話はおもしろい」「古い時代に興味が出てきた」、そんな感想を児童が抱いたとしたら、その授業は成功だったといえます。

＊　＊　＊

平成二十三年度版の教科書は、新しい学習指導要領に対応して編集されています。その内容の一部を紹介します。

■物語を楽しむ■

古典には不思議な話や奇想天外な話が数多くあります。これは、わたしたちの祖先がたいへん細やかな観察眼や豊かな想像力・表現

力をもっていたことを示していますし、またそれをほかの人々と共有する喜びを大切にしていたことを示しています。

読んで楽しい、おもしろいと感じることは、読書活動の根本的な魅力の一つです。新しい教科書では、昔話や神話にふれ、物語を読む楽しさを通じて、伝統的な言語文化の世界に親しめるように編集されています。

『天にのぼったおけやさん』（1下）

おけや（桶屋）さんが、風呂桶をつくっていたときに、たががはずれて空高くはじきとばされてしまいます。その後、傘屋の手伝いをしているうちに風にあおられて今度は天まで昇り、雷神の手伝いをすることになります。ところが、雲から落ちてしまい……と不思議な体験を重ねていきます。

おもしろいと思った部分を音読してほかの児童に聞いてもらうという活動を設定することで、この物語のよいところを明確にし、そのうえで学習の交流の機会を設定しています。

このほかに『いなばのしろうさぎ』（2上）、『かさこじぞう』（2下）などの文章によって、物語を読む楽しさが味わえるようになっています。活動の指示も、学習指導要領に示された内容にふさわしいものが設定されています。

■日本の文化に親しむ■

語彙が豊富であること、言葉に関する知識があることなども、求められる言葉の力の一つです。ふだんから、読書をよくする児童とそうでない児童とでは、知っている言葉の数に大きなへだたりがあります。

ことわざ・慣用句・故事成語などは、現在でも日常生活の中でよく用いられています。それらを学習することは、それぞれの言語表現を豊かにすることでもあります。

そして、ことわざ・慣用句・故事成語などの学習はそれにとどまらず、その背後に存在する伝統的な言語文化の世界に気づかせることにもつながっています。こうした学習を契機として、言葉の世界に興味を抱く場合も少なからずあります。

『故事成語』（4下）

「五十歩百歩」を例に故事成語について説明し、「漁夫の利」の意味と成り立ちを解説しています。続いて「とらの威を借るきつね」「矛盾」などの故事成語を示し、意味や成り立ちを調べる、故事成語を使って文を作るなどの活動を設定しています。

『ことわざ・慣用句』（3下）でも、さまざまなことわざや慣用句を学んだり、使い方を考えたりして学習します。

■日本の文化を考える■

いくつかの作品を例にひき、それに解説をくわえながら、日本の文化や言葉について考えさせる教材もあります。歴史と時代のかかわりや昔と今の言葉のつながりなどに関する理解が深められるようになっています。

『「物語」を楽しむ』（5下）

題名どおり、昔から現在まで、人々がさまざまな手法で物語を楽しんできたという視点から日本の文化を紹介しています。また、教材中には『竹取物語』と『平家物語』の冒頭の一部を原文で示し、文語の文章に親しめるようになっています。

『言葉は時代とともに』（6下）では、夏目漱石『坊っちゃん』、芥川龍之介『杜子春』、正岡子規の俳句と短歌、『万葉集』の和歌などを紹介し、言葉には時代とともに変化した部分がある一方で、時代を経ても変化していない部分もあることを示しています。

■文語の響きにふれる■

文語の文章の響きやリズムにふれることは、日本語の豊かさに気づいたり、その美しさを味わったりすることでもあります。そうした学習経験の積み重ねが、言葉を大切にする態度を育てることへとつながっていきます。

三年生から六年生まで、各学年に親しみやすい文語の文章を配しました。

『俳句に親しむ』（3上）

俳句という文芸形式に親しめるよう、導入の部分で小学生の作った句を紹介しています。

俳句が十七音であること、季語が入っていることを説明したあと、四季それぞれに二句ずつ、合計八句の俳句を解説とともに示しました。より俳句に親しめるよう季語の例をあげ、俳句創作の活動を設定しています。

『短歌の世界』（4上）

藤原敏行や藤原定家の名歌のほか、良寛や与謝野晶子の親しみやすい歌など、六首を解説とともに示しました。

この教材では「心にしみてうれしかりけり（心にしみじみと感じてうれしかったなあ）」という下の句を提示し、それに合わせて五・七・五を考え、音読するという活動を設定しています。

『漢文に親しむ』（5上）

孟浩然『春暁』と李白の『静夜思』という二編の漢詩と『論語』『大学』からごく短い二つの章句を現代語訳とともに掲載しました。文語の部分にはすべての漢字にふりがなをふり、どの児童も、漢文の簡潔なリズムを味わえるようにしてあります。

『春はあけぼの』（6上）

清少納言の『枕草子』に関する解説の文章と序段および活動の指示とで構成しています。原文の中で現代の言葉と読み方の異なる部分にはすべて読み方を示しました。原文とともに現代語訳と写真を収め、内容の理解を助けるようにしています。

文学単元での『薫風』や『迷う』などの現代の随筆とも関連させ、随筆を書く活動へと発展できるようにもしてあります。

■文語に親しむ■

文語の文章に親しむための方法はいくつかあります。次にそのいくつかを示しますが、すべてを活動に取り入れる必要はありません。通常は「1」と「2」の活動でかまいません。児童の発達段階や学習状況に応じて、その他の活動を適宜取り入れればよいでしょう。

1　文章の朗読を聞く。

教師による範読のほかに、音声CDなどを利用するとよいでしょう。文語の響きに親しませるのは重要なことです。

2　文章を音読する。

正しい読み方がわかるようになったら、音読することができます。口語のよさがその明快さ・平易さにあるとすると、文語の魅力は格調の高さにあります。音読をしているだけでも、学習の充実感を味わうことができます。

3　文章を書き写す。

自分の手で書くことによって、古典作品により親しむことができたり内容の理解が深まったりします。

4　文章を暗唱する。

文化的に価値のある内容を記憶し、それを声に出して再生することは、精神を活性化させるといわれています。名句や名歌は折にふれて話題にのぼる（テレビ番組で紹介されたり、随想で引用されたりする）ので、覚えていると古典の世界に親しみを感じる機会が増えます。

5　他の児童と唱和する。

声を合わせることで、学習の達成感を味わったり、気持ちが高揚したりします。共通した学習体験をもつことは、学習集団の連帯感を強めることにつながります。

6　覚えた文章を丁寧に書く。

美しい色紙や短冊などに、自分の好きな言葉や文章の一節を書くのは楽しい活動です。行事などと関連させるのもよいでしょう。

■終わりに■

活動の設定の仕方、授業の進め方にはいろいろな考え方があります。「正解がたった一つだけ存在する」というわけではありません。児童一人一人の学力や集団の学習状況を把握して、それに応じた指導をすることが大切です。それができるのは、授業担当者であるみなさんだけです。

小学校における伝統的な言語文化の学習が本格的に始まろうとしています。新しい教科書が楽しく充実した授業に資することを心から願っています。

説明文教材を用いて論理的思考力をはぐくもう

横浜国立大学
教育人間科学部附属
横浜小学校教諭
茅野（かやの）　政徳（まさのり）

川崎市内の公立小学校を経て現職。研究主任として「共に学びをつくりあげる力」をキーワードに学校全体の研究に取り組みつつ、国語科では「読むこと」を中心にさまざまな文種を用いた単元学習を開発しながら、児童が考えを形成し、交流する学びの過程を研究している。

新学習指導要領の理念・考え方をふまえて

来年度の新学習指導要領完全実施まで、残すところ半年となった。それに伴い、現在、全国各地の小学校や研究組織において、新たな教材・教具の開発やカリキュラム作成などの準備が着々と進められている。

そこで、来年四月から使用される新版教科書の改訂点に着目して、その内容を見ていきたい。

「ひろがる言葉」という書名には、子どもたちの言葉の世界を広げ、言葉をとおして実生活や今後の生き方をより豊かにしていってほしいという願いが込められているという。教科書に閉じこもった言葉の世界ではなく、そこで得た技能や知識、はぐくまれた言葉の力が、他教科の学びや実生活、その後の言語活動に生きてはたらくものになってほしいとの期待が込められている。

さらに、「言葉をひろげる」原動力となるのは、子どもの主体的な学びであり、確かな言葉の力である。それを保障し、子どもが自らの手で言葉の世界を広げていけるよう、領域・学年・六年間の系統性を意識した教材の内容や配列がなされている。

以下に、新学習指導要領の理念・考え方をふまえ、新版教科書の説明文教材について、現行（平成十七年度）版教科書と比べながら、教材作成や配列の意図、指導上意識すべきポイントなどについて見ていきたい。

「確か」で「豊か」な言葉の力を

中教審答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学級の学習指導要領の改善について」二〇〇八年一月十七日）の「7. 教育内容に関する主な改善事項」に第一として取り上げられたのが、「言語活動の充実」である。そこには次のように書かれている。

> 各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。（中略）国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけでなく、（中略）コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。
>
> このため、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。

言語活動の充実が各教科に位置づけられたことで国語科の役割と重要性がさらに増したといえる。私たちは、日常生活において言葉をとおして物事を理解する。その理解のうえで論理的に思考し、相手や場に応じて適切な判断を下す。それを他者と伝え合うのも言葉をとおしてである。

また、「おいしい」「にぎやか」「まぶしい」など味覚・聴覚・視覚をはじめとした感覚も言語化して認識するのである。まさに言葉は私たちの思考と心の源と言っても過言ではなかろう。

今回、各教科に「言語活動の充実」が位置づけられたことには大きな意味があるが、それは反面、子どもたちの「言葉離れ」から生じていることも忘れてはならない。

現代の子どもたちは、核家族化や情報化社会の影響により、直接言葉をとおして他者と意思疎通を図ったり、自らの思いや考えを表出したりすることが不慣れであると感じる。また、読書時間や書く機会の減少も見逃せない。新学習指導要領を概観すると、それらの課題に対応しようとする姿勢が見てとれる。その一つが「言語活動例」の重視である。具体的な言語活動を各領域に位置づけ、再構成し、指導事項との一体化を図ることによって、「話す・聞く」「書く」「読む」といった言葉の力をはぐくもうとしている。

また、「読むこと」の領域において、「自分の考えの形成及び交流」という事項が新設された。これは、さまざまな文章に対して自らの考えを表出し、他者と交流する中で考えをより広げ、深めるという新たな読みの学習のあり方を提案しているといえる。ＰＩＳＡなどの国際調査から見えた課題の克服に向け、受動的な読みから能動的な読みへの転換を図ったともいえるだろう。新しい教科書でそれを最も具現化しているのが、五年生下巻の『世界遺産　白神山地からの提言』である。

能動的な読みを支えているのは、「確か」な言葉の力である。言葉を正確に理解し、表現する力である。そのような「確か」な言葉の力のうえに「豊か」な言葉の使い手は存在する。新版教科書は、確かな言葉の力をはぐくむために、手引きや脚注などの細部を工夫している。そのうえで言葉の世界を広げ、豊かな言葉の使い手になることを願って、五〇〇冊以上の図書を紹介したり、六年生上巻『日本語をコンピューターで書き表す』など、言葉そのものを題材にした教材を新たに掲載したりしている。

次は、具体的な教材を例に新版教科書の特徴や改善点を見ていこう。

説明的文章で確かな言葉の力を

まず、説明的文章ではぐくみたい言葉の力とは何かを考えたい。それは、六年間の系統立てた指導によりつちかわれる正確な読解力、論理的思考力、情報活用力、説明的な表現力などであろう。その基礎をはぐくむのが低学年である。

低学年の説明文教材は、「説明とは、要旨を示して詳しく述べること」を子どもたちに示すためのものである。そのために子どもたちは、まず一年生上巻で二つの説明的文章を学習する。『なにが、かくれているのでしょう』と『だれが、たべたのでしょう』である。この二つの文章に共通しているのが、「説明とは何か」を理解するための基礎がおさえられる構造になっている点である。

まず、『なにが、かくれているのでしょう』では、しゃくとりむしとこのはちょうを取り上げ、「問題事象を言葉と写真で示しながら問いを設定し、ページをめくると問いの答えに出会う」という順序で文章が展開する。このような文章を読むことをとおして、「説明とは、問いに対する答えを示すこと」だと学ぶのである。

じょうずに　かくれる
ことの　できる　むしは、
ほかにも　いろいろ　います。

教材の終末部では、「じょうずにかくれることのできるむしは、ほかにもいろいろいます。」と示し、その「むし」に五枚の写真を対応させている。何と何が対応しているかを把握することは、論理的思考の第一歩である。

次に『だれが、たべたのでしょう』だが、この教材も『なにが、かくれているのでしょう』と同様の枠組みをもち、「問題事象の提示、写真による確認、問いの提示、問いの答え、問題事象との照合」という展開になっており、それが三回繰り返される。文章量も増え、構

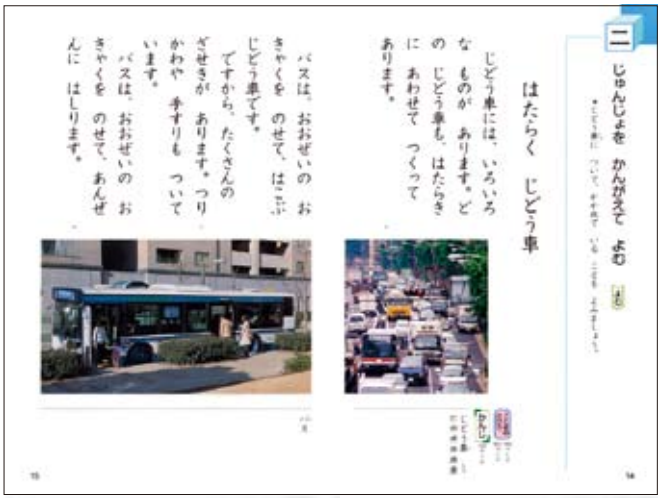
造的にも複雑化し、より論理的思考力がはぐくめるようになっている。

この教材でも、終末部で他の動物へと話題を広げている。動物の食べ跡から発展し、身近な動物への関心を読書に結びつけようとしている。この二つの教材により、正確に書いたり、口頭で説明したりするという「説明的な表現力」の基礎が身につけられる。そしてこの学習が、一年生下巻の『はたらくじどう車』へとつながっていく。「説明とは問いに対する答えを示すこと」という概念を学んだ子どもたちが、さらに「説明とは何か」を学ぶ重要な教材として位置づけられている。「説明とは、要旨を示して詳しく述べること」という概念を学ぶのである。

『はたらくじどう車』は、冒頭で

じどう車には、いろいろな　ものが　あります。どの　じどう車も、はたらきに　あわせて　つくって　あります。

と、要旨を述べたあと、バス、コンクリートミキサー車、ショベルカー、ポンプ車と四つの事例をあげ、その「はたらき」と「つくり」を解説する。「どこに『はたらき』が書いてあるか」や「どこに『つくり』が書いてあるか」を要旨に照らして読み取っていくことが重要である。



この教材には、まとめの部分がない。これは、冒頭の要旨に合わせて、他のはたらく自動車の事例をつけ加えていくことができるようになっているからである。児童に、いろいろな自動車の「はたらき」と「つくり」を考えさせてみよう。それが次の「書くこと」教材『のりもののことをしらせよう』にスムーズにつながっていく。

また、現行版では「つかいみち」という言葉を用いているが、「がくしゅうのてびき」では、

(2)　それぞれの　じどう車は、どんな　はたらきを　しますか。

(3)　「つかいみち」に　あわせて、どのように　つくられて　いますか。

となっている。多くの実践で「はたらき」と「つかいみち」という言葉の混在について課題があるといわれている。その点を考慮し、新版では「はたらき」と「つくり」という言葉を前面に打ち出すとともに「がくしゅうのてびき」を整理している。

【現行版】

じどう車には、いろいろな　ものが　あります。どの　じどう車も、つかいみちに　あわせて　つくって　あります。

⇨

【新版】

じどう車には、いろいろな　ものが　あります。どの　じどう車も、はたらきに　あわせて　つくって　あります。

次に本文の文章構造についてだが、この文章は、一つ一つの自動車の「はたらき」と、そのはたらきに合わせた「つくり」と具体的な「はたらき」を三段落構成で説明している。これは、現行版から変わりはない。大きく改変したポイントは次の二点である。

① 第三段落の役割の明確化と主語の一致

バスを例にポイントを示す。現行版では、第一段落において、「バスは、おおぜいの　おきゃくを　のせて　はこぶ　じどう車です。」と、はたらきを示している。そして第二段落で「ですから、たくさんのざせきが　あります。つりかわや　手すりも　ついています。」と、はたらきに合わせたつくりを示している。ここまでは変わりない。つぎの第三段落は、

【現行版】

バスは、きまった　じこくに、きまった　みちを　はしります。

⇩

【新版】

バスは、おおぜいの　おきゃくを　のせて、あんぜんに　はしります。

となった。第二段落で示された「つりかわとてすり」は、第一段落の「おおぜいの　おきゃくを　のせて、はこぶ」というはたらきのためのつくりであるが、第三段落でふれられる「あんぜんに」にも関係している。第一・二段落との関連性を明確にしているのである。このことは、コンクリートミキサー車でもいえる。

【新版】

コンクリートミキサー車は、なまコンクリートを　はこぶ　じどう車です。

ですから、おおきな　ミキサーを　のせています。

コンクリートミキサー車は、なまコンクリートが　よく　まざるように、ミキサーを　ぐるぐる　まわしながら、こうじをする　ばしょに　はこびます。

「生コンクリートを運ぶ」というはたらき、「ミキサーを乗せている」というつくり。この二点をさらに補足し、統合する役割をもったのが第三段落なのである。

また、現行版では第三段落に主語が示されていなかったが、新版ではどの自動車についても第一段落と同じ主語を置いている。これは新学習指導要領〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「(カ)文の中における主語と述語との関係に注意すること。」を意識したうえで、先に述べた「説明的な表現力」の基礎をはぐくむための改変であろう。

② 「はたらき」を正しく、そして詳しく

先に例示したコンクリートミキサー車では、第三段落において「なまコンクリートがかたまらないように」という表現を、「なまコンクリートがよくまざるように」と改めている。言葉の機能の一つである「事実を正確に伝えること」を意識しての措置であろう。できる限り正確に事実を文章化し、子どもたちに理解してもらえるよう、さまざまな専門機関に協力を得たのだろう。その一例がミキサーのはたらきである。こうした細かな表現を大切にすることは、子どもたちが自ら文章をつづる際にも大事なことである。

次に、ショベルカーを例に、詳しさについて述べたい。

【現行版】

ショベルカーは、こうじを　するときに　つかう　じどう車です。

…

うでと　バケットを　うごかして、じめんを　ほったり、けずったりします。

⇩

【新版】

ショベルカーは、じめんを　ほったり、けずったり　する　じどう車です。

…

ショベルカーは、こうじの　ときに、うでと　バケットを　うごかして、あなを　ほったり　たくさんの　土を　けず

ったりします。

ショベルカーのはたらきは、地面を掘ったり、削ったりすることである。そのために長い腕と丈夫なバケットを持っている。そのはたらきとつくりをより詳しく述べているのが第三段落である。簡単に書いたり詳しく書いたりするという効果的な書き方は、高学年の「書くこと⑴ウ　事実と感想、意見などとを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。」の指導事項へとつながっていく。その基礎となる説明の方法を学ぶことができるのも、この教材の特徴といえよう。

写真にも注目したい。新版ではその自動車の全体を写した写真に加え、コンクリートミキサー車では生コンクリートが出てくる写真、ショベルカーではバケットの写真を追加している。街中では、事例として取り上げた車が走っている光景を目にすることはできるが、すぐそばでその車のつくりやはたらきをじっくり観察することはできない。特に工事関係車両をよく見る機会は少ないだろう。そのような子どもの生活実態に考慮した紙面づくりになっている。

学習のてびきを活用しよう

「がくしゅうのてびき」にも注目してほしい。新版では、「ここがだいじ」というコーナーが設けられた。新学習指導要領に示された言語活動例や〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕などをしっかりとおさえるねらいがある。『はたらくじどう車』では、「ですから」と「だから」の使い分けを示している。これは、学習指導要領の「(キ)敬体で書かれた文章に慣れること。」をおさえるねらいもあるのである。

ここがだいじ

「ですから」と「だから」

ポンプ車は、かじを　けす　じどう車です。

ですから、ホースを　つんで　います。

ポンプ車は、かじを　けす　じどう車だ。

だから、ホースを　つんで　いる。

(p.19)

「てびき」には1〜3までの活動例が設けられている。注目してほしいのは、2・3に、ノートに書きまとめる活動が示されていることである。具体的な活動としては、

2　ぶんしょうには、どんなじどう車がでてきましたか。ノートにかきましょう。

3　つぎのことをノートにまとめましょう。

・それぞれのじどう車は、どんなはたらきをしているか。

・「はたらき」にあわせてつくってあるのは、どんなところか。

子どもは、2の活動で四種類の自動車をノートに記す。そのうえで、3として、一つ一つの自動車について、「はたらき」と、それにあわせた「つくり」を表にするなどしてまとめる。読み取ったことをノートにまとめることは、自らの読み取りを自覚し、より論理的思考力をはぐくむことにもつながるので大切である。

ひろがる言葉を支えるのは

子どもたちの確かな言葉の力をはぐくみたい。豊かな言葉の使い手になってほしい。それは私たち教師のだれもがもつ願いである。その願いを実現させるためには、まず、確かな言葉の力をはぐくむ学習をつくりあげることである。子どもたちは期待に満ちあふれた目で新しい教科書を開く。そのきらきらした目をよりいっそう輝かせることができるのは私たち教師である。

ぜひ教材の細部まで目を通し、この教材で何を学ぶのか、どのような力をはぐくむのかということを明確にして指導に取り組み、一人でも多くの子が目を輝かせながら話し、聞き、書き、読む国語教室を創造したい。

加藤多一と北の文学

札幌学院大学教授
渡辺　知樹

『五月になれば』のふるさと

加藤多一さんと二度ほどお会いしたことがある。柔和な表情の奥に、もの書きとしての芯の強さを感じる。日々の暮らしの話はおもしろく、ことのほか釣りの話には熱がこもる。生まれ故郷の川では、ニジマス、ヤマメ、アメマス、オショロコマなどが泳ぐと話してくれた。

旭川から車で約二時間。オホーツク海の港町紋別の手前に滝上町がある。この町中を流れる清流がサクルー川である。教科書五年生上巻『五月になれば』の舞台だ。加藤さんは一九三四年、この町の農家に生まれた。

加藤多一と剣淵町「絵本の館」

旭川の北、剣淵町は「絵本の里」として有名である。町の中心部には訪問者の心を温かく包み込む「絵本の館」がある。私が訪れた時、全国から集まった絵本のコンテストの最中で、今年の全応募作品三一八点の展示は壮観だった。

加藤さんは北海道大学を卒業後、札幌市役所勤務を経て稚内の大学教員となる。その後、この「絵本の館」設立のリーダーと知り合ったのが縁で一九八八年に剣淵に移り住んだ。

本棚には加藤さん、手島圭三郎さん、あべ弘士さん、後藤竜二さんなど、北海道を舞台に活躍する作家をはじめ、世界各国の絵本が並び、原画も展示されている。「絵本の館」は、絵本の原画の収集数の多さで有名だが、建物も見逃せない。建築家鈴木敏司さん設計の機能的で美しい建物だ。一度は訪れる価値がある。

塩狩峠と見本林での三浦綾子

三浦綾子は、雑貨屋を営みながら小説『氷点』を書き、作家になった。旭川を中心に、三浦綾子に関する記念館が二つある。

一つは「塩狩峠記念館」（三浦綾子旧宅）であり、もう一つは「三浦綾子記念文学館」だ。

三浦綾子の自宅は、かつて旭川市内にあった小さな雑貨店で、初期の代表作『塩狩峠』『道ありき』などが執筆された。一九九三年に取り壊しを惜しむ声が多く、旭川の隣和寒町の塩狩駅の傍に移築したのが、この「塩狩峠記念館」である。夫光世さんとの慎ましい生活の様子が手に取るようにわかる。

「三浦綾子記念文学館」は、「ひかりと愛といのち」をテーマに一九九八年に開館し、小説『氷点』の舞台となった営林署の見本林の一角にある。旭川駅

から車で一〇分ほどの距離だが、静かな佇まいの中、ゆっくり足を運びながら、「人はどのように生きたらよいのか」という三浦文学に流れる根源的な問いに耳を傾けることができる。写真や原稿、年表と執筆した作品をとおして、そんな演出がなされている。

どちらかではなく、ぜひ、二つの「館」の三浦綾子に出会ってほしい。分かれて建っていても、彼女の「願い」ともいうべき一本の線で結ばれている場所なのだから。

ところで、加藤さんは、全国の小中高校生対象の三浦綾子作文賞の審査員や、文学館での講演も行っている。夫の光世さんは滝上町で幼少期を過ごしたことがあるという。二人は旧知の間柄にちがいない。

ナナカマドと井上靖

井上靖は「サンデー毎日」の懸賞小説に応募した『流転』で受賞、新聞記者を経て小説家になる。『氷壁』など、新聞小説で国民の心をつかみ、『天平の甍』『敦煌』などで国民的作家になった。

さて、旭川には「北鎮」と名のつく所が今も多々ある。「北を鎮める」意味であり、昔から師団があった。井上靖は一九〇七年、春光町の師団宿舎で生まれた。父は軍医であり、一歳で父の従軍によって旭川を離れている。

幼少期から青年期までの自伝的小説として、『しろばんば』や『あすなろ物語』を発表するが、これらの作品に流れる静かな淋しさは、父の従軍先について行くことができず両親と離れて伊豆で暮らしたことによる。

旭川開基一〇〇年で旭川を訪れた折、井上靖は、「八三年前にこの地で生まれた。多くのものは時の流れの中で変わってしまった。だが、白い雪を載せたナナカマドの実の赤さだけは今も変わらない。」と語った。両親と共に暮らした日々の思いを、ナナカマドの美しさに重ねたのだ。

井上靖の没後、生前、最も幸せな時を過ごしたこの旭川に、夫人から資料が寄贈され、「井上靖記念館」が誕生した。

「北海道立文学館」と「札幌芸術の森」

北海道の冬は零下三〇度を、真夏は三〇度を超える。一世紀も前の先人たちはどんな理由があって、この地に渡ってきたのだろうかと思うことがある。

「北海道は、人間が原型で生きることを要求される土地だ。人間がナマで自然にぶつかって生きるほかない。」と、かつて北海道立文学館で加藤さんは語った。馬についての講演ではこうも語った。「私は馬が好きだ。ながい顔もいいし、ちょっと淋しそうな目の色もいい。草原をかけぬける馬。そりをひいて雪原をとぶ馬。悲しみにたえている馬。こういう馬のいる風景のむこうから、人間の家族、馬の家族のやさしい会話が聞こえてくる。」

この馬を思う心情は、昭和六一年度版の六年生の教科書に載った吉田元の『道産子』の主題と深く重なり合っている。

加藤さんのえがく児童文学の世界では、北の大地に立ち向かいながらも、自然の仕組みを知り、人や家畜と支えあって生きなければならない人の謙虚さや優しさがある。そして人のおごりに対する怒りや淋しさが加わる。

札幌の中心部、緑豊かな中島公園の一角に「北海道立文学館」がある。北海道ゆかりの文学者の足跡を常設展示し、直筆原稿など膨大な資料も保管されている。札幌の市街地を離れて南に行くと、市民が親しみをこめて「ゲイモリ」と呼ぶ、「札幌芸術の森」がある。広大な山麓に広がる美術館も含めた芸術文化空間である。加藤さんが市役所勤務時代に、実務責任者としてオープンさせた札幌の宝と言っていい場所である。こちらにもぜひ足を運んでほしい。

読む単元
笑顔いっぱい
四年一組 かがやき寄席

横浜市立三保小学校
主幹教諭
小林（こばやし） 康子（やすこ）
横浜市小学校図書館研究会所属。

４年下巻『ぞろぞろ――落語』

「伝統的な言語文化」にふれる

新学習指導要領では、国語科の内容について、従来の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域のほかに、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設された。

子どもたちは、日常生活の中でしらずしらずのうちにことわざや慣用句を用いたり、落語の『寿限無』を口ずさんだりしているが、これらが日本の昔からある伝統文化の一つであることや、昔から今の時代に至るまで人々の生活に受け継がれていることにまでは気がついていない。

そこで、子どもたちに、伝統的な文化にはさまざまなものがあることや、そのおもしろさを知ってもらうために、四年生下巻「本の世界を広げよう」から『ぞろぞろ――落語』の教材を用いて、古典にふれる学習を試みた。

落語の魅力

落語は、江戸時代から伝わる庶民の口承の文化である。そこには、飾らない人々の性格や生活の様子が描かれている。また、話の展開もわかりやすく、「落ち」による笑いもある。落語の話そのものに大きな魅力がある。その話をおもしろおかしく噺家が語るのを聞いていると、時間を忘れてしまう。

また、自分自身が「語る」楽しさもある。紙面に書かれている文章は同じであっても、話し言葉になると、声質、音量、抑揚、話し方、仕草、表情など、十人十色である。また、同じ人が語っても、その時の状況や気持ちのもち方によって、語りは変化する。現在発している言葉は、まさに今、自分自身が生み出しているものである。自分にしかできない表現のおもしろさである。

さらに、落語には話し手と聞き手が一体となる心地よい空間がある。

このように、魅力がたくさんある落語を、子どもたちにもぜひ、素直な目で、心で浸ってほしいと考えた。

単元の流れについて

出会い	○教師の落語を聞いたり、ＤＶＤ等の資料を見たりして落語に興味をもつ。
第一次	○さまざまな落語の本を読み、落語に親しむ。 ○「笑顔いっぱい　四年一組かがやき寄席」を開き、五年生や保護者に聞いてもらうという課題をもつ。 ○落語について調べ、豆知識本を作る。
第二次	○『ぞろぞろ』を読み、おもしろさを味わう。 ・情景・登場人物・話の展開・落ち ○語る時に気をつけたいことを考える。 ・全文通読・役割読み・気に入ったところを暗唱する・仕草・視線等

第三次	○自分が語りたい演目を選び、練習する。 ・選んだ演目ごとのグループに分け、リレー落語になるよう分担する。 ○『ぞろぞろ』で学習したことを生かし、語る工夫をする。 ○三遊亭円窓師匠による「落語の授業」を受ける。
第四次	○「笑顔いっぱい　四年一組かがやき寄席」を開く。

○指導の実際

興味・関心を引き出す導入

落語との出会わせ方を考えた末、わたしが落語の『平林』を語ることにした。わたしにとって初めての経験で、うまくいくとは思えなかったが、わたしの小話や読み聞かせを楽しみにしている子どもたちには、いちばん親しみやすいと考えたからである。下手ながら、一生懸命語るわたしの落語に、子どもたちは大いに興味をもったようであった。

そこで、「聞いて楽しい」から「語ってみたい」と子どもに思ってもらえるように、一本のDVDを用意した。これは、今活躍しているお笑い芸人四人が、それぞれ別々の師匠に弟子入りして落語を習い、一か月後に四人で寄席を開くという、テレビのドキュメンタリー番組のDVD版である。そこには、段階に合わせた練習方法や落語の用語の解説が、わかりやすく示されていた。「落語って難しそう」と思っていた子どもたちは、このDVDを見て「やってみたい」と意欲をもちはじめていった。

円窓師匠のアドバイス

「語る時は目で語る。聞く時も目で聞く」

自分の語る文をひととおり覚えたものの落語の雰囲気が出ないと悩んでいた子どもたちに、三遊亭円窓師匠が「落語の授業」をしてくださることになった。「ぼくたちも師匠に弟子入りだ」と、まるでDVDの話の再現のような展開に、子どもたちは興奮状態であった。

円窓師匠からの、

「目に輝きがないとだめなんだ」

「目に力がないと、話は聞いてもらえないよ」

「『おうい、貞吉』と呼びかける時は、教室のいちばん後ろを見るんだよ」

などの具体的なアドバイスを、子どもたちは真剣に聞いていた。アドバイスを生かした友達の落語が変わっていく瞬間をまのあたりにして、子どもたちは目で語りはじめた。

相手意識をもって伝える

師匠が語る目線の先に、あたかも人がいるように思えたり、刀が見えたりする体験をした子どもたちは、聞き手が語り手とともに情景を思いうかべながら話に聞き入る体験をする。今まで、一方的に語るだけで伝えようとしていた子どもたちは、円窓師匠の落語を聞いて、落語は、語り手と聞き手が一緒につくりあげることを体で感じたのだ。

「師匠の落語は、聞き手の気持ちをとらえている。相手を意識して語っている」と違いに気づいた子どもたちは、間の取り方に気をつけたり、目線や仕草を鏡で確認したり、友達に見てもらったりして、聞き手に伝えるための努力を始めた。

終わりに

子どもたちは、昔の人々が、明るく、たくましく生きる姿を感じ取りながら、落語を語っていた。伝統文化にふれる大切な一歩であった。

そればかりではなく、子どもたちは、語りかけることの楽しさを感じるとともに、語りに必要な技能（声の大小・間の取り方・声の出し方・語る速さなど）や、非言語コミュニケーション能力（目線や仕草など）を伸ばすことができた。

学習のまとめとして寄席を開いたが、保護者や五年生からは、「本物だ」「笑いが止まらなかった」など、賞賛の声をいただいた。

学習が終わったあとも、子どもたちから「祖父母と寄席に出かけたよ」「お正月は親戚の人の前で落語をして喜ばれたよ」という声が聞かれた。将来の夢は落語家という子どもも出てきて、興味や関心の継続も見られた。

学習したことを生活の中に生かそう
――文字の効果的な表し方を考えてポスターを書く――

青森県平川市立松崎小学校　宮本（みやもと）　忍（しのぶ）

一　はじめに

子どもたちは、各教科での学習や総合的な学習の時間、学級活動や委員会活動の中で、新聞作りやポスター作りを経験してきている。

しかし、完成した作品をよく見てみると、「筆記用具を選んで効果的に書く」といったところまでは思いが至っていないことがわかった。

そこで、子どもたちの意識を高めるために、「ポスター作り」を「生活に生かす活動」と位置づけ、よりよく内容を伝えるための学習を設定することにした。具体的には、文字の組み立て方に気をつけて、字形を整えて書くこと、文字の大きさや配列を意識して書くこと、筆記用具を選ぶことなどを指導の柱とした、合科的な扱いでの学習計画となった。

新学習指導要領「第5学年及び第6学年」での「書写に関する事項」には、

> ア　用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。
> イ　目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

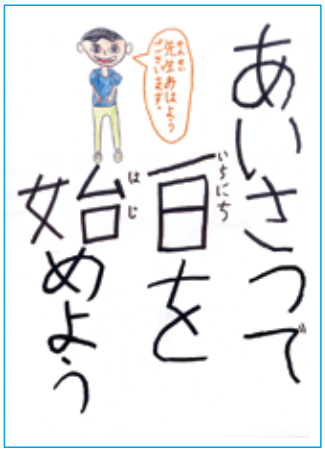
とある。ポスターの内容が、相手により一層伝わるようにするために効果的に書くということから、「ア」の前半部分と「イ」についての取り組みを試みた。

二　指導の実際・展開（第5学年）

	単元計画（4時間）	時間
1	「全校のあいさつについて考えよう」 ・代表委員会に向けた話し合い （学級活動）	1
2	「あいさつ運動のポスターを作ろう」 ・さまざまな筆記用具について考える。	1
3	・構成を考え、下書きをする。	1
	・選んだ筆記用具で清書する。	1

代表委員会の議題である「あいさつ」について、全校や学級の様子を話し合った。より活発なあいさつができるようにするために、ポスターを作り、全校児童に呼びかけようということから単元を構成した。

本稿では2と、3の一時間めを、次ページにて紹介する。



（フェルトペンを使用）

三　おわりに

今回の学習では、「筆記用具を選ぶ」という活動を設定した。さまざまな筆記用具を実際に使ってみることで、子どもたちがその特徴を発見し、目的に合った用具選びや書き方を考えることができた。普段、何気なく使っている筆記用具を意識して使うことで、新しい発見につながった。

下書きや清書の活動では、効果的なポスターを書くための視点を与えたことで、用紙に対する文字の大きさや字間、余白など、書写で学んできたことを生かして取り組めていた。試し書きや友達との意見交流を何度も繰り返したことで、課題を見つけ、修正を加える児童の姿が見られた。また、書いたものを、見る距離を変えて何度も見直すことも自発的にできていた。

これからも、子どもたちがわかっているつもりの既知の事柄に、新たな視点や課題を与えることで、興味・関心をもたせ、新たな発見・より深い理解に到達できるような授業づくりに努めたい。

（色筆ペンを使用）

2 さまざまな筆記用具について考える。（2／4時間め）

目標　さまざまな筆記用具の特徴を知り、書く目的に合わせた用具を選び、書き方を考えることができる。

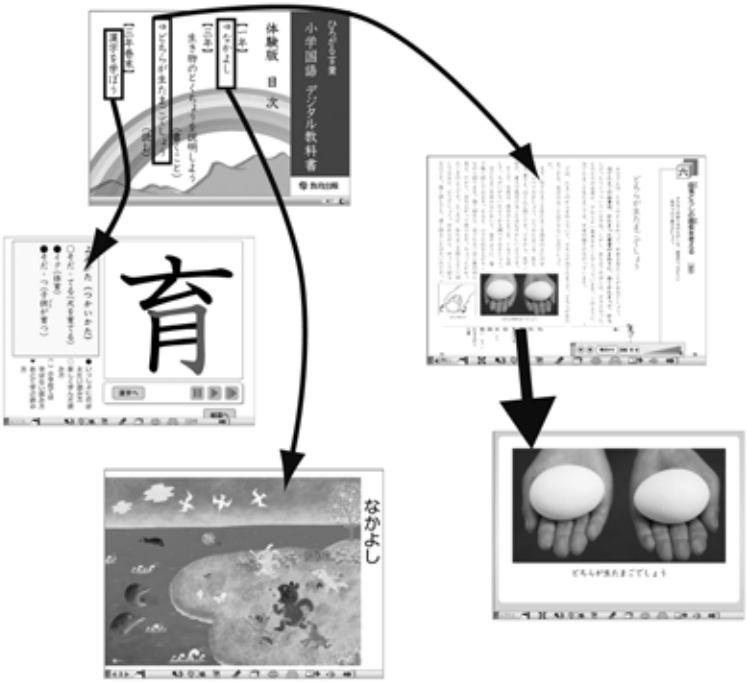
学習活動	指導・支援の展開と留意点
①学習のめあてを知る。	いろいろな筆記用具の特徴を知り、ポスターに合う選び方、書き方を考えよう。
②さまざまな筆記用具を使用し特徴を考える。	○身のまわりにある筆記用具について、どんな場面で使用するか経験を発表するよう促す。 ○自分の持っている鉛筆や、教師の準備したフェルトペン、筆ペン、サインペン、毛筆、絵の具筆などを使って文字を書き、その特徴について各自で考える。
③筆記用具の特徴を話し合い、ポスターに合う筆記用具や書き方を考える。	○ポスターは遠くからでもよく見えるように書きたいので、太く大きく書ける筆記用具がよいことを確認する。 ○フェルトペンは、ペン先の使い方によって、毛筆や筆ペン、絵の具筆は、筆圧によって文字の太さが調整できることを確認し、ポスター作りに生かすように促す。 ○ペンや絵の具の色使いによる見え方の違いも確認し、用具選びに生かすようにする。
④まとめ 自分のポスターに使いたい筆記用具を選ぶ。	○使いたい筆記用具と、学習の感想を発表する。 ○自己評価をする。

3 構成を考え、下書きをする。（3／4時間め）

目標　内容が伝わるように構成を考えて、下書きすることができる。

学習活動	指導・支援の展開と留意点
①学習のめあてを知る。	内容が伝わるように構成を考えて、下書きをしよう。
②参考作品を調べ、読みやすい構成について考え、話し合う。	○参考作品を示し、読みやすく書くためのポイントに気づかせる。 ○全体の構成において、大切な点を確認する。 ・文字の大きさ ・イラストの入る位置 ・上下、左右の余白 ・伝えたい内容が目に留まるように書く。
③全体の構成を考えて、設計図を書く。	○画用紙より小さい紙を準備する。 ○各自考えた文字数に合わせた配列、イラストの位置などを考えるように促す。
④設計図をもとに画用紙に下書きをする。 ・友達と見せ合い、修正を加える。	○下書きは消せるよう鉛筆で薄く書く。 ○できあがった下書きを友達と見せ合い、読みやすい構成になっているか話し合い、修正を加える。
⑤まとめ	○読みやすい構成を考えた下書きになっているか自己評価、相互評価をする。

デジタル教科書でひろがる授業。



みんなで見る！ みんなで考える！

動きや音を使って授業内容を**強力にサポート**します。
「今どこを読んでいるの?」「線を引くのは何行め?」
そんな子どものとまどいがなくなります。

平成23年度用　小学校教科書準拠

教授用ソフトシリーズ

体験版
CD-ROM for Windows®

教育出版では，以下の教科でデジタル教科書を制作します。

小学国語	デジタル教科書 1～6年（各学年CD-ROM）	小学社会	デジタル教科書 5～6年（各学年CD-ROM）
小学算数	デジタル教科書 1～6年（各学年CD-ROM）	小学理科	デジタル教科書 3～6年（各学年CD-ROM）

予価：（各 **63,000** 円）　※各教科・各学年ごとのお求めとなります。1～6年，3～6年，5～6年をまとめた価格ではありません。

編集部からのお知らせとお願い

平成 22 年度用『ひろがる言葉　小学国語』教師用指導書『別冊（朱書編）３下』の訂正とおわび

平成 22 年度用『ひろがる言葉　小学国語』教師用指導書『別冊（朱書編）３下』につきまして，下記の部分に誤りがございました。おわび申しあげますとともに，ご指導の際にご留意たまわりますようお願い申しあげます。

箇所	誤	正
３下・Ｐ 66 上段	（「うかんむり」の例）空・実・字・守など	室・実・安・守など

※下線部を訂正いたします。

平成 22 年度用移行措置資料について

平成23年度から小学校の新しい教育課程が全面実施されますが，これにそなえて，平成21年4月1日から平成23年3月31日まで，いわゆる移行措置が行われております。

編集部では，平成21年度版小学国語教科書『ひろがる言葉　小学国語』を使用しながら，平成21年度，平成22年度の2年間にわたって，新学習指導要領への移行が円滑に行われるよう配慮した学習指導計画案をはじめ，資料をご用意しましたので，ご活用いただければ幸いです。

資料は，PDFファイル，ないし，Excelファイルになっており，弊社ホームページからダウンロードしてご利用いただけます。

今年度は，移行措置最終年度となり，国語科においては，「ローマ字」の移行措置が必須となっておりますので，ご指導に際してご留意たまわりますよう，お願い申しあげます。

弊社新版教科書をご使用いただく際に，ご留意ください

平成 23 年度版『ひろがる言葉　小学国語』では，以下の言語教材の指導学年が変更になります。

教材〈指導内容〉	現行本の扱い	新版教科書の扱い	対応が必要な学年
送りがなのきまり	６年生	５年生	新６年生（現在５年生）
敬語	６年生	５年生	新６年生（現在５年生）

そのため，新版教科書でご指導いただきますと，「対応が必要な学年」の児童につきましては，上記 2 教材の指導内容が取り扱われないことになりますので，ご留意くださいますようお願い申しあげます。

なお，弊社小学国語科ホームページ上で，上記 2 教材の指導内容に関する抜き刷りと指導資料がご利用いただけます。これらを参考にしていただき，指導上のご配慮をお願い申しあげます。

弊社ホームページ　http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/index.html
※ホームページへのお問い合わせは，下記までお願いいたします。
EducoNet 事務局　E-mail：educonet@kyoiku-shuppan.co.jp

教育出版編集局

教育現場とリンク
教育出版
EducoNet（エデュコネット）の会員を募集しています！

入会金・会費は無料です！

フレッシュな教育情報 地球となかよし

EducoNet（エデュコネット）とは…

会員の皆様に，インターネットを通じて教育情報をご提供します。

教育関係者専用のWEBサイトです。

役立つ資料・情報の宝庫です。

●教育情報……教育界の動向等の情報提供
●教科のページ……年間指導計画・評価基準・高校シラバス・教科別お役立ちコーナー・編集部からのお知らせなど
●メールマガジン…教育関連情報をタイムリーに発信

会員は…
◆会員専用のコンテンツにアクセスできます。
◆メールマガジンが定期的に配信されます。

申し込みを受け付け後，ID・パスワードを勤務先に郵送します。

教育出版 EducoNet 会員登録について
★ WEB にて受け付けています！！
教育出版ホームページまたは http://educonet.jp/entry.html にアクセスしてください。
※個人会員のほかに，教育委員会・学校単位での申し込みも受け付けます。

教育出版ホームページの主な内容
http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

EducoNet（会員制）
・年間指導計画　・評価基準
・教科別お役立ちコーナー
・教科通信　・ニューズレター
・各種教育情報　・編集部から
・メールマガジン

■ 情報提供
…●教育情報　●総合的な学習　●研究会日程
■ 各種リンク集
■ ご案内
…●教科書内容　●教師用指導書　●教材品
■ 教科書関連資料・写真館
■ 新刊書紹介
■ もの知りテーマパーク
■ 地球時代の教育情報誌Educo

教育出版　▶▶▶ EducoNet 事務局　E-mail : educonet@kyoiku-shuppan.co.jp

小学国語通信　ことばだより　〔2010年 秋号〕　2010年10月1日　発行

編　集　：教育出版株式会社編集局
印　刷　：大日本印刷株式会社
発　行：教育出版株式会社　代表者：小林一光
発行所：教育出版株式会社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-10　電話　03-3238-6864（お問い合わせ）
URL　http://www.kyoiku-shuppan.co.jp

地球となかよし 教育出版

これは，わたしたちの活動理念を表したシンボルマークです。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は，科学技術の進展や国際化，情報化，高齢化などによって，今，大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で，人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには，人や自然を大切にしながら，共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは，この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め，社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社　〒060-0003　札幌市中央区北3条西3丁目1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445　FAX: 011-231-3509

函館営業所　〒040-0011　函館市本町6-7函館第一生命ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886　FAX: 0138-31-0198

東北支社　〒980-0014　仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391　FAX: 022-227-0395

中部支社　〒460-0011　名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821　FAX: 052-262-0825

関西支社　〒541-0056　大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221　FAX: 06-6261-9401

中国支社　〒730-0051　広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033　FAX: 082-249-6040

四国支社　〒790-0004　松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193　FAX: 089-943-7134

九州支社　〒810-0001　福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL: 092-781-2861　FAX: 092-781-2863

沖縄営業所　〒901-0155　那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411　FAX: 098-859-1411